

アルチュセールのメッセージはいかに受け止められたか

西川長夫

1

ご紹介いただいた西川です。よろしく申し上げます。この二日間のセッションの間、ぼくはどこに身を置けばよいのか、いわばポジションナリティの問題で悩んでいました。この場に立つてぼくにはどうやら二つの負い目があるようです。

第一の負い目はここで扱われたテキスト「再生産について—イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」の翻訳者の一人であること。翻訳者というのはとかくそのテキストに精通した、何でもわかっている人のように思われがちであり、あたかもテキストという聖典を守る僧侶のような役割を果たす者のように考えられがちですが、それは偏見です。

もうひとつぼくにはこのセッションを企画、実現した院生たちに対して教員という嫌な立場にあるが、これは否定しようがない現実です。ぼくには嫌いなものがけっこう多く、嫌いなものの順位があって、天皇制はかなり上位にあるが、アカデミズムや教員というのもそれに劣らずランキングは高い。その嫌な職業を40年以上、よくも続けてきたものですが、もういい加減に御免をこうむりたいという気持ちが強い。だが長年教員を続けてきたせいで教師根性がなかなか抜けきらないのも事実です。試験の採点や評価を生業とする者の口調がこの発言にも染みついていられるかもしれない。最後に総括セッションで発言を求められたということ自体、一種の誘い水ではないか。しかし大学の公的機関である先端総合学術研究科や国際言語文化研究所が主催し、多額の予算が組まれている事業である以上、何らかの形で教員の参加が求められるというのが現状です。

そんなわけでこのセッションに参加するにあたってぼくはひとつのことを心に決めていました。それは求められるまで絶対に発言せず、このアルチュセール・マラソン・セッションの傍観者というか、マラソンの道端の応援者に徹することです。それでセッションの始めから終わりまでじっくりと観察させてもらい、発言や野次はひかえてもっばら拍手だけの応援をさせてもらいました。結論的な感想を一言でいえば、ああしんどかった！だがこれは実に見ごたえ聴きごたえのある素晴らしいゲームであったと思います。

2

それぞれのセッションについてごく簡単に意見というか感想を述べさせてもらいます。まずセッション1。このセッションは『再生産について』を今読むことの意味はどこにあるか」と題されていました。コメントをされた大中一彌、伊吹浩一、山家歩、お三人の意見はそれぞれ文章として報告書に収められる予定なので、ぼくはなるべくそれと重ならない形で、お二人の

発表者の報告について述べさせてもらいます。1934年の「東京日日新聞」に掲載された中野重治のテキスト「風習の考え方」を、アルチュセールと戸坂潤のイデオロギー論から読み解く林淑美さんの報告は、ぼくにはとても興味深く感銘を受けました。とりわけ「第一次イデオロギー」に対する「第二次イデオロギー」（『再生産について』、133～134頁）に言及された部分。テキストのこの部分はこれまでの訳書にはない、つまり今回の新訳ではじめて読者の目にふれた部分なので、だれかがこのテキストの重要性を指摘してくれないかと心待ちにしていたのですが、このように一步踏み込んだ形で指摘してくれたのは林さんが最初だと思います。もっともこの草稿部分は何度読み返してもよくわからないところがあって、これが正解であると断定できる解釈を提示することはぼくにはできないのですが。これからいろいろ論議が行われる、その先鞭を林さんがつけてくれたのだと思います。

林さんがこれまでも幾度か指摘されているアルチュセールと戸坂潤の理論的な類似と親近性については、全くその通りだと思います。ここで少し翻訳の問題について触れさせていただきたいのですが、ぼくは翻訳を単なる異言語間の言い換え、つまりテキスト内の関係というよりは、もっと広い意味で考えていて、訳された言語がその社会の現実の中にかに入りこみ生命を得るかということまでを考えることにしています。こうした広い意味の翻訳の概念は、例えばホミ・バーバ（『文化の場所』）の考え方に近いもので、彼の場合はそれが後発国や植民地における模倣の問題などと結びついてきます。林さんが提示された、アルチュセールを通して戸坂を読み、戸坂を通してアルチュセールを理解し、そうして得られた戸坂＝アルチュセールの解読格子によってテキストやさらには現実の社会を読み解いてゆく方法は、ぼくにとっては理想的な翻訳の形態のひとつでもあります。

もっともこうして林さんのお話をききテキストを読んでいくと、どうしてもアルチュセールよりも戸坂潤の方が魅力的に見えてしまう。それは「風俗」の問題もそうですが、おそらく戸坂の理論の方が日本の現実の中により直接的でより柔軟に入りこんでいるからだだと思います。年代的には戸坂の方がアルチュセールより30年も先輩ですから、戸坂の先駆性はやはりすごいことだと思います。だがぼくは戸坂とアルチュセールの間に日仏の差や時代の差をあまり感じなかった。むしろ時代と地域の異なる二人に共通性を強く感じるということは、二人が同じマルクス主義理論の伝統の中において、同じ問題を共有していたということではないかと思います。（以上のコメントは林さんの当日の報告を念頭に置いて述べられている。林さんがこの論集に出して下さった別の論考「日本ファシズムをアルチュセールで読む」では、同じくアルチュセールの『再生産について』のなかではこれまで最も注目されることのなかった「法的イデオロギー」が扱われていて、アルチュセール研究者にとってもきわめて示唆に富んだものであることを、付け加えておきたい）。

林淑美さんのお話が娘の身売りを強いられる貧しい農村の「風習」の中に身を置いてそこから現代を射照している一女工哀史的な現実、戦後の日本にも存在したし、現在の中国や後発諸国にもあります一に対して、それを受けた平井玄さんのお話はアルチュセールのテキストに刻印された、そして平井さん自身の高校時代の記憶につながる1968年の体験と都市のストリート（新宿文化）の物語から始められています。このお二人の受け継ぎ方とコントラストがぼくには興味深く思われました。

平井さんは68年の「プロトアナキズム」的な特徴に注目し、学生たちが「進駐」していった上部構造、つまり文化・イデオロギー装置が、やがて市場化されることによって収拾されていた過程をたどっています。30年前『再生産について』が書かれた時代には考えられなかったような資本主義の展開と国家のイデオロギー諸装置の変容が進行している現在において、『再生産について』をどのように読み直すことができるか、という問題を提起されたのだと思います。アルチュセールが国家のイデオロギー装置として列挙したものの最後に置かれていた「情報・文化装置」が今は最も重要なのだという指摘と、闘争の場であったストリートが、広告産業によって占拠されてしまっている現状のお話は、ぼくにはたいへん説得的でした。

ただあえて異論という疑問を提出すると、「上部構造への侵入」から「下部構造への侵入」と言うとき、それはどのような下部構造を考えているのか、またどのような具体的な運動を考えているのか（たしかベーシック・インカムの問題に言及されていたと思います）を、もう少し詳しく説明してほしかったと思います。それからこの問題をアルチュセールの再生産理論の解釈にかかわらせて言うと、『再生産について』は残された草稿のタイトルが「生産諸関係の再生産」であることからわかるように、再生産を論じるときここで第一に強調されているのは「生産諸関係」であって「上部構造」ではありません。マルクス主義の古典的な国家論が下部構造と抑圧装置を強調したのに対して、アルチュセールがそれまで無視されていた「国家のイデオロギー装置」を取り上げて、それが国家論の転回につながるという経緯があって、「国家のイデオロギー装置」ばかりが有名になってしまい、このマラソン・セッション全体にもちょっとそういう傾向が見えるのですが、ここで「再生産」の意味とアルチュセールがなぜそれを強調したかを考える必要があると思います。

それからもうひとつ、平井さんは最後に、今は「戦時下である」ということを強調されましたが、その場合に「戦時下」とは何を意味するのか、これももう少し説明がほしかった。とりわけ9.11以後、戦争の形態が変わり、ぼくも今は「戦時下である」と言いたい気持ちがあるのですが、しかし他方ではこういう重要な問題は簡単に扱ってほしくないという気持ちもあって、最後に付け加えさせてもらいます。（なお、セッション1には萩原一哉さんの力作論文「〈危機〉をめぐる政治—〈合意〉への批判と沖縄の〈現在〉」が収められていますが、これは事後に提出されたものなので、ここでのコメントは省略させていただきます）。

3

セッション2の第一報告は、「高槻の在日学校と松本のニューカマー」となっていますが、関西在住の者にとっては身近な高槻市で「高槻むくげの会」をたちあげて長年在日教育にかかわってこられた紀井早苗さんに、信州の松本でニューカマー学習会のNPOなど実践活動をしながらか先端研の院生でもある能勢さんがインタビューをする形をとった対談ですが、ぼくは高槻が在日韓国・朝鮮人教育の発祥の地であることも、松本がニューカマーの多い地域であることも知らなかったもので、教えられることの多い対談でした。

在日にせよニューカマーにせよ、それぞれに歴史的なあるいはその時代の国家間の対立や矛盾、不平等な問題を背負っているわけですが、現に生活が行われているのは地域ですから、差

別撤廃や差別是正の運動はそれぞれの地域の現実のなかで行わなければならない。逆に言えば地域の生活のなかに国際的な最先端の問題が表れてくる。民族と国籍の問題はその一つだと思いますが、「権利としての国籍取得」、「民族学校ではない共生のあり方」といった言葉が耳に残っています。それから地方行政や学校が体質的にもっている同化主義的な圧力にいかにかんじてゆくか。それは「いじめ」の問題につながっているが、そうした現状をいかに認識し、広く伝えてゆくか。孤立しがちなさまざまな運動、例えば外国人支援と障害者の運動、あるいはフリーターと外国人労働者との提携といった提案がありました。それはどのようにしたら可能なか、時間があればもう少し立ち入ったお話を聞きたかったと思います。

第2の報告、上山和樹さんの「引きこもり―根拠なき順応と、交渉弱者」は、身につまされる思いで聞かせてもらいました。「引きこもり」というものが何であり、それに対する人々の対応がいかに見当はずれであるかを、短時間でこれほど見事に話された例は少ないと思います。だが聞いていて疑問や不満がないわけではありません。それはおそらく上山さんが「引きこもり」をあまりにも外部に閉ざされた世界として描いてしまっており、出口が見つからないことにかかわっています。外部の者として拒まれた私たちには手のほどこしようがない、という印象を強く受けました。何を手がかりにして他者とつながりうるのか、その可能性をもう少し話していただきたかった。

外部の者として拒まれた私たちにも、多少とも「引きこもり」的要因があるのではないかと思います。そこにむしろつながりの可能性があるのではないか。上山さんは話を聞く限り、アルチュセールにはほとんど関心をもたれていないような印象を受けましたが、アルチュセールの「引きこもり」的状态はかなりひどいもので、通常の市民生活はできない人でした。それはついに妻を殺してしまうところまで行く。だが彼は文章を書き理論を構築することによって外部との細いつながりを求め、実現していた。私がアルチュセールに心をひかれた第一の理由は、普通の哲学とは違う、その異様な情念を秘めた文体の魅力でした。

山田潤さんのお話は、プログラムにはコメンテーターと記されていますが、学校と工場、それも定時制と町工場という下層の日の当たらない場所に身を置いて生活し観察することのできた人間の、30年にわたる社会変化の体験と考察の貴重な証言として聞かせていただきました。イギリスと日本における職種や職業に関する労働者自身の考え方の違いについてのお話も興味深かったのですが、ぼくが特に強い印象を受けたのは、教室の荒廃と職場の荒廃とその双方のつながりについての、実際の経験をふまえた上でのご指摘です。

「成長が止まり、企業の存立が危うくなればたちまち能力主義むき出しの選別がはじまりかねないこと」の思想的な準備がまったくできていなかった」というご指摘は全くその通りだと思います。教室の荒廃と職場の荒廃は小中学校や企業に限らず、大学においても同じことで、業績主義や能率主義、金取り主義がはびこり始め、大学の教室や職場の人間関係や人間そのものが壊れ始めていることを（過去が良かったという意味ではありませんが）、ぼくも長年、40年以上もその場において次第に痛感するようになりました。だが山田さんのおっしゃるような「働きた」に関する「生活思想」は、この日本の（あるいは世界の）現実のなかでいかにして形成可能なか、「逆転の可能性」について、もう少し具体的に議論のできる時間があればよかったと思います。

この点に関しては、おそらく山田さんのように長いスパンの中で、独自の視点からこの問題を考察してきた人と、いきなりこの現実の中に投げ入れられて生きはじめた若い世代の間には、見方や感じ方かなりの違いがあるのではないのでしょうか。山田さんは「個人史」という言葉を使っておられますが、セッション2の1つの対談と2つの報告ではいずれも実践にかかわる個人的な経験が語られている点で独自のセッションとなっており、フロアの参加者はそれぞれの思いで聴くことができたと思います。

このセッションはアルチュセールにかんする言及がほとんど無い点でも独自のセッションでした。それはそれで良かったと思うのですが、ここでほくはこのセッションのテーマ「『ニート』議論で語られないこと—なぜ、まだシンドイのか」を読んだときの疑問を改めて述べておきたいと思います。まず「『ニート』議論で語られないこと」とは、「ニート」についての議論をより深めようということなのか、それとも「ニート」についてはここでは直接には触れないということなのか。もし、前者であれば（このセッションの責任者が「ニート」の研究者である橋口さんであったから、多くの出席者がそれを期待したと思う）、このセッションでニートについて直接立ち入った報告や議論が行われなかったのはなぜなのか。また後者であれば、どうしてそういう立場をとるのかについて、もう少し説明の必要があったのではないか。また「なぜ、まだ、シンドイのか」の「まだ」は何を言おうとしているのだろうか。このシンドさが一時的なものであって、やがてシンドさは解消されることを前提としているとは思われないが、「シンドイ」という言葉は情緒的な喚起力が強い反面、あいまいで多義的な意味をもつだけに、その言葉を投げ出すだけでなく、どう受け取るかについてより立ち入った説明が必要だった、とほくは思います。

さらにこのプログラムの趣意書には、以下の文言が記されています。「このセッションではこのことを念頭に置き、現在の「ニート」議論では語られない学校と労働、再生産の問題を議論したい。またこの過程でアルチュセールの「再生産」論の今日的可能性と限界が浮上してくるだろう。」とりわけこの後半の文章（アルチュセールの「再生産」論の今日的「可能性」と「限界」）について、主催者の側はどのような見通しを持っていたのか、またセッションが終わってどのような「可能性」と「限界」が見えてきたのか。これはセッションの責任者からもう少し立ち入ったコメントをぜひ聞きたいところでした。

このほくの疑問に答えてくれたのは、コメンテーターの今野晃さんでした。今野さんのコメントはセッションでは時間の制限もあって、フランスの現状の紹介に力点がかけられておりすこし場違いな印象を受けたのですが、後に寄せられた論考「現代社会の再生産：ニート・ひきこもり・移民問題とアルチュセール再生産論の〈可能性〉」は、まさしくこのセッションで出された問いに正面から答えようとした力作だと思います。ここでその内容を改めて紹介する余裕がないのは残念ですが、この記録集が出たら改めてこの論考を中心に議論を深めるような機会があればよいのと思います。このセッションは数多くのずいぶん興味深い問題が提起されているのだから。

社会構成体の〈周辺〉をめぐる第3セッションでは、小野俊彦さんの「門司港の朝鮮人労働者—主体になり損ね、暴力を記憶する」、原口剛さんの「寄場—流動的下層労働者の抵抗史」という、2つの現場に根をおろした、研究としてもレベルの高い充実した報告があり、さらに後に山本崇記さんの力作論文「都市下層における反差別のかたち—日雇い労働のなかの「部落」と「在日」」が加えられ、マラソン・セッションの沿道における応援者としては、道端というよりは厳粛な学会に出席しているような錯覚をおぼえ、緊張して読ませてもらいました。それに対して阿部小涼さんのコメントの詩人的な反応はむしろ沿道からの声援に近いものだと思います。深い共感をもって読ませてもらいました。それにこのセッションに関しては大野光明さんの実に見事なコメントと総括があるので、ぼくとしてはさらに付け加えることはほとんどありません。ここでは沿道の野次馬として二、三感想を述べるだけで止めさせていただきます。

第一に、「軋み」あるいは「不調和音」について。大野さんはアルチュセールの「歯車が軋む音をたてる」や「調子はずれの音」といった表現をとりあげて、それを予定されていて結局は書かれなかった「再生産について」の第2巻の、「国家のイデオロギー装置を大きくはみ出して展開するであろう階級闘争」のテーマや、第1セッションで林淑美さんが指摘された「二次イデオロギー」の問題に結びつけています。これはアルチュセールの理論を考える上でたいへん重要な問題提起だと思いますが、このセッションの報告者たちはむしろ朝鮮人の港湾労働者や寄せ場の下層労働者、あるいは「部落」や「在日」といった周辺の未組織の下層労働者を扱う際に感じとられる、アルチュセール理論との不調和、「軋み」の問題を提出していて、アルチュセール解釈の「軋み」がそこに現れているように思いました。この点はお互いにもう少し深く考えてみてもよいのではないのでしょうか。

もう一つの興味深い「軋み」は、コメンテーターの阿部さんの詩的な文体と他の御三方の学術論文的文体のあいだの「軋み」（あるいは不協和音的な共鳴と言うべきかもしれません）の問題です。この点も大野さんは実に敏感に感じとっていて、「抵抗を記述するには、学術論文のようなスタイルには限界があるのかもしれない。阿部の文体が顕著なように、ポエティックなリズムとグルーブの中、書き連ねられた文字の余白にこそ書き込まれるべきものかもしれない」と書かれています。ぼくは長年、教員をしていて学術論文の書き方を指導する立場にあるわけですが、年々マニュアル化し権威主義的になっている学術論文にいい加減うんざりしています。反抗的、反権威主義的な主張をもった論文が権威主義的な様式や文体で書かれることの矛盾について、若い研究者たちはどう考えているのだろうか、とつい問いかけてなくなり、教員としてこれはヤバイと口をつむぐのですが。実際、学術論文という様式は近代の大学制度が生み出した、実に奇妙な驚くべき産物だという実感が年々強くなってくるのですが、これは退職を間近にひかえた老人の暴言としてお許しください。マラソン・セッションの主題にかえて言えば、アルチュセールを問題にするのであれば、彼や若い同僚たちがこだわった教育や学校の問題を、自分たちの足元を見る自分たちの問題としてとりあげ、論文の問題を含めてこのシンポジウムのあり方自体を問題化する視点があってもよかったのではないかと思います。

第2に、これはきわめて素朴な疑問ですが、日本の周辺の問題を論じながら、どうして世界

の周辺とのつながりの問題が重要なテーマとして浮上して来ないのか、ということです。ほくの考えでは、移民にしろ、在日にしろ、あるいはその他の底辺の労働者や農民にしろ、世界の周辺部とのつながりが具体的で重要な問題としてあるのですが、三つの報告にはそれらの問題に対する言及があまり無かったと思います。それはどういうことなのか、報告を聞きながらいろいろ考えていたのですが、第1の解釈は、それはあまりにも自明のことであえて言及するまでもないということ、だがはたしてそうでしょうか。その他に社会学といった学問の性質や実証の困難といった方法論上の問題もあるのかもしれませんが。

第3に、これはこのセッションに限らず全セッションを通じての問題ですが、アルチュセール理論への言及は、ここでは『再生産について』だけに限られ、それとの関連でアルチュセールの他のテキストが問題にされるのが全くなかったのは、少し不思議な感じでした。『再生産について』の下巻は書かれることなく終わりましたが、アルチュセールは、それ以後にもいくつかの重要な論文を書いており、例えば1978年の日付のある『自らの限界にあるマルクス』を読めば、アルチュセールの国家論についてもう一步踏み込んだ、あるいは少し違った角度からの議論ができるのではないかと思いつつながら、マラソン・セッションを聞いていました。

第4に、これはほとんど余談ですが、第2セッションの「引きこもり」についての報告を聞いたときから、ずっと考えていたのですが、若者の引きこもりについては（あるいはニートやフリーターについても同様ですが）熱心に語られるのに、老人の「引きこもり」や老人の貧窮についてはなぜ語ろうとしないのでしょうか。ここに出席している最年長の者としておたずねしたい。実はほくはこの数日体調をこわしてほとんど「引きこもり」の状態にあったので、「引きこもり」の話には、ある種の共感というか切実な気持ちできいていたのですが、ついに老人は無視されたようです。（この問題については後の討論でいくつかの発言があった。まともに取り上げていただいたことに感謝したい。示された解釈の一つは、老人のひきこもりが問題にされないのは、老人が労働力としてカウントされていないからで、そのことは「引きこもり」に対する一般の議論が資本の論理に従って行われていることを示しているという指摘（林淑美さん）や、老人のひきこもりは、身障者の問題として考えるべきである（片山知哉さん）といった示唆に富んだ指摘があったことを記しておきたい）。

最後に。以上ごたごた述べ立ててきましたが、全セッションを振り返って、これはやはりマラソン・セッションの呼び名にふさわしい、すごいことが行われたのだと思います。ほく自身、全セッションを通じて出された数多くの問いや呼びかけに応えようとすれば、あと何年もかかりそうです。おそらくこのエネルギーは、この企画と実行が先端研の院生主体で、院生の自発性にもとづいていることにかかわっていると思います。だが院生主体とは結局何であったのか、何でありうるのか。セッションの組織運営にかんしても考えるべきこと、反省すべきことも多かったですように思います。マラソン走者にはそれぞれの感想があったと思いますが、道端の応援者には走者たちの目にみえなかったことが見えるといった場合もあると思います。ほくとしては、参加者の皆様全員に心からのお礼を言いたいと思います。院生の場合にも、この記録には名前が残っていない、例えば受付やその他で協力してくれた多くの院生がいたことを忘れないようにしたいし、さまざまな人目につかない場所で応援してくださった方々、先端研や言語文化研究所の事務の方々に対してもお礼を言いたいと思います。ほくにとっては、何かある一つ

の事が行われるには、いかに多くの方々の好意と協力が必要であるかということ、少し離れたところから観察できた良い機会でもありました。無事にマラソンが終りこのような見事な記録集が完成したことに感謝し、共に喜びたいと思います。

後記

私をはじめこの文章を当日の発言の忠実な記録として残すつもりであったが、後に皆さんから寄せられた最終的な原稿を通読して、当日の発言に大巾な手を加える必要があることを知った。その結果、本稿がいくらかフィクショナルな文章になっていることをお許し願いたい。